

甲田の裾

KŌDA NO SUSO

7 号



—大阪ハンセン病協力会の皆さん—



甲 田 の 裾 第 7 号 通巻524号 目 次

「おい」を考える(7) —痴呆老人とつきあうために—		後 藤 昭	1
合同歌会開催		青森アララギ会 白樺短歌会	3
藤田さんと詩吟		山 野 信 一	4
ぼくのはそ道		滝 田 十和男	6
ハンセン病と世界の切手		大 高 興	8
星と詩人		神子沢 新八郎	11
通信歌評	成 田 小五郎選	15	
短 歌	白 樺 短歌会	16	
欣 求 俳 壇	村 上 三 良選	18	
みちのく集	佐 藤 静 良選	18	
明 鏡 集	鈴 木 可 香選	19	
老人慰安文芸	親 睦 会	21	
あの遠い日から(五十四)	菊 池 盈	24	
身延のかがり火(二十二)	野 中 武 祉	27	



「老い」を考える (7)

―痴呆老人とつきあうために―

後藤 昭

人とのつきあいには、心くばりが大切であることは言うまでもない。が、痴呆老人とのつきあいには、更に慎重な心構えが求められる。

私は、痴呆老人とつきあう際に求められるものとして次のような言葉を並べてみた。

じっくり、

なおさず、

あせらず、

はつきり、

あわせて、

やさしく、

ていねいに。

まず、老人の話をじっくりと聞くことである。よく聞きもせずとばして聞いたのでは、わからないままにこちらの考えを押しつけることになってしまう。

また、物を盗られるとか、ひがみっぽい話が出てくることがある。そんな場合、老人の考えを説得によって無理になおそうとすると、かえって話がこじれてしまうことになる。話をそのままに聞く容認の態度が欲しい。

否定することなく老人がそんなことを考えているのかと聞くことである。

話しかけはあせらずに、しかもはつきりとすべきである。老人の考えは、ゆっくりとしたテンポであり、耳が遠かったりして聞きのがすこともあることを考慮しておくべきであろう。老人は、思考も行動もゆっくりしているから、周囲の若い人は、老人にあわせなければならぬ。

更に、痴呆老人は知能面の障害が目立つものの、感情の動きは見られる。その感情面への接触をはかるために、やさしい態度が求められるであろう。

介護する人達、多くは家族であるが、痴呆老人とつきあっていると、はじめは情ないという気持ちになるが、やがて介護する人達は疲れ果て、そのため荒っぽい言葉や態度で老人に接するようになる。これは力のなくなった老人にとっては大変つらいことである。こうして老人は追いこまれた心理状態となり、不安定となる。家族の態度が痴呆の状態を更に悪くしている例をよく見かける。

以上述べたことが痴呆老人とつきあう際の態度である

が、これは痴呆老人だけでなく一般の老人についても配慮すべきことと言ってもよい。更に言えば人間同志のつきあいで必要なことであって、殊更あらためて言う程のことでもないかも知れない。

ところで視点をかえて、痴呆老人の介護のあり方を考えてみたい。

一つは心情的な介護があげられる。

言うまでもなく、老人は今の時代を築くために努力して来た人達である。この人達を遇するに、尊敬し大切にすべきことは当然である。恩がえしとしての介護とも言えるかも知れない。

もう一つは経験的な介護である。

このような場合にはこうするのがよいという一般的な方法が見つけれられる。工夫を重ねた経験とも言える。科学的な介護といってもよいだろう。

以上の二つの介護が、バランスよく組み合わせられて、よい介護が生まれる。

話が前後するが、よい介護を考える際に、痴呆老人をどのように見るかということ、根本に据える必要がある。このことについて私が共感をもつ表現に次のようなものがある。

“痴呆老人の姿は、障害をもちながら何とか生きようと懸命に努力している、あるいは困惑している姿である。

“このような姿を私たちは坐して見ている訳にはいかな

い。

痴呆老人に対する直接の援助は勿論必要であろう。な程次々に老人のための施設が生まれている。しかし痴呆老人と言ってもその問題は多彩である。特徴のある施設がもっと生まれてもよいのではないかと思う。

また、行政が老人問題についてかなり配慮していることは事実であるが、民間に多くの施設の運営をまかせているのも事実である。経済大国といわれる我が国としては、これでもいいのかという感慨も当然であろう。

次にボランティアについて述べなければならぬ。最近各方面でボランティア活動が見られるようになったが、痴呆老人のためのボランティア活動が一層活発になることを祈ってやまない。

痴呆老人であっても、勿論できるだけそれぞれの家庭で過ごすことが望ましいが、それには家族の努力が求められる。家族の体力精神力が限界に達した時、社会の援助が自然に集まるということになれば嬉しいことである。以上痴呆老人について述べたが、一般の健康老人についても同じことが言えるのではないだろうか。

(完)

(筆者・県立つくしが丘病院長)



— 合 同 歌 会 風 景 —

合同歌会開催

青森アララギ会 白樺短歌会

十月十六日（日曜日）午後一時より園内公民館に於いて、青森アララギ会と、白樺短歌会の合同歌会が開催された。

これは、昭和二十四年成田先生が県庁にお勤めの頃、一人で短歌の指導の為に訪問されてからのお付き合いで、時々青森アララギ会の会員が来園されて合同歌会が開かれていた。四十年代に入ってから、園のバスを使って園外に出て、田代平、茅の茶屋高原、夜越山、夏泊半島、観瀾山、高山稲荷などを一年おきに合同吟行歌会と園内に於いて歌会が開催されていたのであった。高山稲荷での合同吟行歌会には、地元の中村雅之さん、千田俊穂さんの参加を頂いた事もあった。近年は、会員の高齢化と不自由度の進行などによって参加者が少なく吟行は行なわれなくなってしまう。又、毎月会員の部屋を借りて開催されていた歌会も、と絶え勝たなくなって来たのでせめて二年に一度の合同歌会は開きたいものだと思っていたのであった。秋は多忙になるから六月頃にでもと心がけていたのであったが、私が入院するはめとなり開催が遅れ十月になったのである。

当日は、晴天ではあったが、十月中旬の氣候としては肌寒い日であった。午後〇時三十分頃第一陣桜庭さんが一人見えられた。初めての方にしてはまっすぐに会場に来て頂いたと思ったら、お話を聞く役所にお勤めの頃、用件で新谿さんの寮まで来た事があるとの由、この辺りの寮だった事を記憶して居られた。今の公民館のすぐ南側に新谿さんが住んで居た古い寮があった事などを語り合っている間に、皆一緒に会場へ入って来られた。

青森アララギ会より十一名、白樺短歌会より六名、午後一時、矢島の歓迎の挨拶にはじまり、青森アララギ会の出席者の半数は初めての方々でしたので自己紹介、初

藤田さんと詩吟

―函館市点訳グループひとみ会前会長

故藤田徹一氏を偲んで―

松丘盲人会副会長

山野 信一

去る九月二十四日の朝、私は、いつものように治療を終え盲人会館に立ち寄りましたところ、昨夜函館から電話があって、藤田さんが二十三日に亡くなられたとの話で大変びっくりし、色々な想い出がわきあがってきました。

めての方は（敬称略）秋庭、西沢、渡辺、桜庭、三上。二度目以上の方、花田、須々田、今（は）、田中、三浦、成田、白樺短歌会は、根岸、滝田、松永、岡村、佐藤、矢島、会員七名中一名は帰省中で不参加。

須々田さんの司会で歌評に入る。二、三人の評を頂いて花田さん成田先生で一首をしめる。司会者の氏名によってどの歌に評が当るか分からないので常に全作品に目を通していなければならないという緊張した一刻ではあった。久し振りの歌会で活性化された気分になったのは私一人ではなかったと思う。完ったのは午後三時半頃、園内を参観し又の機会を約して帰って行かれた。

藤田さんとおつき合いは、昭和三十二年の秋か三十三年の春でしたか。ひとみ会の方々が、はるばる連絡船に乗って私たち松丘盲人会をお訪ねになった時から、毎年春と秋の二回、欠かさず来訪されていますが、その中には必ず藤田さんが入っていました。

昨年の春まで三十年余りの長い間継続された事は、驚異であり、尊い足跡だったとしみじみ思います。ある年の一月下旬、猛吹雪の朝皆さんと雪の山をかき分けるようにしてお出になった時とか、十勝沖の地震があった年の春、荒川秀子さんとたったお二人でおいでになった事など忘れられません。温厚篤実な藤田さんは、どちらかといえば口数が少なく、改まった席での御挨拶は苦手と言われ、座談会の折にもトットツと短く話するのが常で

した。しかし、静かに語る親しみ深いお人柄は、誰にも好感を持たれいつまでも私たちの胸から消え去らない事でしょう。園の機関誌「甲田の樞」をお送りしますと、必ず細々と近況を知らせてよこしましたので、お話すよりは書く方がお得意なのだなあと、私は思っています。

ひとみ会との交流は、昭和三十一年の十月頃、園内を見学に来られた立花千代さん（旧姓、安保）が、ちょうど私たちが点字の機関誌「松丘」を創刊する為に、一台の点字タイプライターと、何台かの点字機を使用して頑張っている所を見られ、「私たちも函館で点訳グループを作っていますから、これからのおつき合いをしましょう」と言われて帰られてから、津軽海峡を隔てて函館と青森との点字による文通がはじまりました。その後、年と共にひとみ会から、クリスマスプレゼントとして何冊かの点訳本が続けて寄贈されたり、朗読テープを送ってもらいました。又マッサージ会の方々も参加するようになり、懇談や歌の交換をして一日を楽しくすごしてきました。

これは、私たちにとって最大の喜びであり、懐かしい両親や故郷を離れて何十年となく療養生活が続けている、私たちハンセン病盲人が、生きる喜びと暖かい友情を与えられ、社会に対する偏見と言うか、アレルギーが薄れ積極的に行動するようになり、盛んになった園のバスレクにも参加し、来訪される他の社会人とも気楽に語り合

えるようになったと私は考えています。

歌の交換に入りますと、昔はカラオケが無かったので、手拍子に合わせて歌ったものですが、藤田さんの歌われた中に、故石原裕次郎さんが歌った「赤いハンカチ」を上手に歌われた事や、詩吟を朗々と聞かせてもらった事を想い出します。腹の底から出す藤田さんの詩吟は、誠に生き生きとして全く別人の感がありました。しかし、晩年にはその詩吟も聞けなかったのは、やはり体調があまり良くなかった為ではないかと、今になって思うばかりです。

点訳の奉仕を長年一緒に続けてこられたひとみ会の皆さんの悲しみは、充分察せられますが、これからも尊い点訳の仕事をお続けになれる事は、すなわち藤田さんの精神を受けつがれて行く事だと思えますので、皆さまには、益々ご健康でお続けになりますよう、又、年二回の松丘訪問を継続され、私たちを喜ばせて下さるようお願いいたします。

断片的に、思い出すがまま筆をすすめましたが、藤田さんのご冥福を心からお祈りし、あの世とやらで再会できましたならば、昔話に花を咲かせたいと念願している私です。

ぼくのはそ道 (三)

滝田 十和男

(本國入所者)

昔なつかし沢あんの味

秋になると、何を思い出す?、と聞かれたら、そりゃ数えきれない程たくさん、たくさんあるけれど、昔から、此の松丘での暮らしの中で、いちばん深く根を下していたのは、あの大根であつたように思えてならない。

昔、農園室というものがあつて、あらゆる野菜を作り完全自給の時代が長く続いた松丘では、大根を抜きにしては生活できない程であつた。

此の地方は、昔、江渡村と呼ばれたところから、地質が火山灰地のため、他の作物はあまり良く獲れないけれど大根だけは、軟らかい肉質の上等なのが出来るので、それが、「江渡大根」として、此の村で産出するものは、街へ売り出しても、他村の物より遙かに高値で買い取られたと云う話が、残っている。

そう云えば、村の農家の人々が、荷馬車いっぱい積み上げた大根の山を町方に運ぶ光景を、よく見かけたりしたものだが、それも今は昔々の古い話で、あの見事な大根畠だった辺りも、白亜のしゃれた新興住宅に衣替え

してしまつた、と云う話題ではないので、話をもとに戻すことにしよう。

松丘の丘稜そのものも、この「江渡大根」の産地の域内にあつた訳で、どこの畠からも、それはそれは見事な大根が良く獲れた。

秋の収穫期ともなると、普段は別な仕事をしている人々も総出で手伝いに駆け付け、土の中から抜き取る者、それを集める者、更にはモッコに入れて二人で担ぎ、運び出す者、まるで、にわかなお祭り騒ぎとなる。

その大根の大半は、炊事場に納めて、これから半年余の長い越冬用に、漬けものにされ、又お汁の実用とされるのであるが、何しろ多いときで七百余の入園者の胃ブクロを賄うだけの量が必要なのだから、その数量たるや大きな工場で生産されるものゝように、おびただしい大根の山が随所に築かれ、沢あんにする干し大根の干場がこれ又、園内至る所の街道筋に設けられたりした。

縄で編まれて吊り下げられた大根は、ちょうど漁村でのイカ干しを思わせる壮観さであつた。

あの光景が、いまま眼に焼きついて、秋になると、どうしても大根が作り出す風物詩に、心が引き戻される。

昔の先輩たちは、曲がつた指に鎌を持ち、血まみれになりながら荒れた土地を耕やし、自分達の命を守る為の野菜作りに、どれだけ吾とわが身を撙減したことであろう。そこでは、もはや病を治すための療養所という姿はなく、たゞ少しでも多く生産を上げることしか考えな

いタコ部屋化したものでしかなかっただけに、干し大根の壮観さの陰で払われた犠牲の大きさは、計り知れないものがあつたと云うことを、吾々は確と記憶に留めておくべきではないかと思う。

そのような犠牲の上で作られた大根であるからこそ、今以って記憶のなかで、血となり肉となつてゐるのだろうけれど、昔あの大きなつけもの樽に、じっくりとひと冬を掛けて漬け込まれた沢あんの味なんてえものは、今どき、鉦太鼓叩いて搜したつて見つかるもんじゃない。

あの芽え芽えとした黄色の切り身を乗せた麦飯の味は、他にオカズが何もないだけに、沢あんの味だけでの食事は、何ともわびしく思つたものだが、今になってみると、あんなに美味しいものは無かつたように思う。

来る日も来る日も、沢あん漬けに千切り大根のお汁と云う時代だから、その当時は、お世辞にも美味しいとも思ふことなく暮らしてゐたのに、食べたければ何でも手に入る恵まれた今の時代に生きて、あのベッコウ色の沢あんの美味さを礼賛するなんて、とも云われそうだが、化学調味料づくめのインスタント製品では、とてもとても、あの自然の味は出せるものではない。

秋が深くなると、沢あんを漬けるための、とてつもなく大きな樽が漏れないように修理される。それは戸田兄にゃと呼ばれた桶屋だった人の手に任される。毎晩遅くまで木工場でトントンと、槌音を響かせていたかと思うと、炊事場ちかくの噴水塔の周りに並べて水を張り、大

根が程よく干し上げるのを待つ、その頃になると消防団の演習などで、一パイ機嫌の男達が、そこら辺を肩を組み高吟して歩いたなあと、懐かしいことばかりが眼に浮かぶ。あの頃から数えて三十年にもならないと云うのに。

沢あん漬けのことから、それにまつわる昔の光景に触れてしまつたが、沢あん漬けに劣らずニシン漬けも、また真つ紅な蕪漬けの味も良かったなあ、まだある紫蘇の実がいっぱい入つた唐芋の漬け物も、格別な味わいで、長い冬の生活に彩りを添えて呉れた。

松丘の暮らしは、冬の期間が矢鱈に長くて、病人が暮らすには、あまり良い条件を備えているとは云え難い所のように思われているが、此処でしか生きられない吾々には、不利な生活条件の下でも、それなりに補うものがある、寒い気候であるからこそ、美味しい漬け物を提供して呉れたものと解釈できる。

これは、北海道の当別と云う所にあるトラピスト男子修道院の生活振りを、その修道司祭から聞いたときの話であるが、あそこでも冬期間は殆ど沢あんばかり一品での食事だと云う。とすれば天国にいちばん近い生活をしていると思われるトラピストの修道士達と、それほど違わない暮らしを、食の部分で共通していたとは嬉しい。

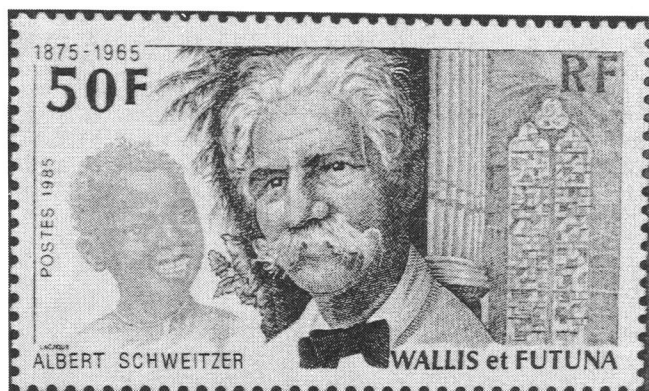
だが、最近のせいたくな吾々の食卓の上を眺めてみると、天国から段々遠くなつて行くみたい。

それにしても、もう一度虫歯の無い歯でパリッパリッと噛んだ、昔のあの沢あんの味を味わつてみてえなあ。

ハンセン病と世界の切手

(4)

大 高 興
(本園内科医長)



(説 明)

一九八五年、ワールリス・フーツナ諸島（南太平洋）で発行したシュバイツァー博士の記念切手。喜ぶ黒人の子供と、やさしい眼差しを向ける博士の温顔が描かれている。タテ31センチ。ヨコ52センチ。

第二話 続シュバイツァー博士

ガボン共和国の広さは二十六・八万平方キロで日本の約三分の二。総人口は約五十五万人で、シュバイツァー病院のあるランバレネは、この国第二の都市であるというのに、当時の人口は、たったの三千人であった。

この国の主な産業は、林業と鉱業（とくに石油）である。

アフリカのガボン共和国のランバレネというところは、地図の上では、日本からたしかに遠い彼方にあるが、今では日本（成田空港）から北極回りの飛行機でゆくと、モスクワ経由で約十四時間でパリに着き、パリからガボン共和国の首都リーブルビルに直行便で七、八時間で着く。更にここから車に乗り数時間でランバレネに着く時代であるから非常に便利になったものである。

しかし気候は、世界最悪の地といわれ、水も日本では、とても考えられないほどの不自由な土地で、蚊をはじめ、蟻、くも、油虫、蟻、百足、守宮、とかげ、蛇のほか、下腿に潰瘍をつくる砂蚤など、さまざまな外敵と戦いながらの生活は容易でないと思われる。

かりに日本から一箇十キロの医薬品を郵便物で送れば一か月ちょっとで届き、日通から航空便で送れば約二週間で現地に到着する。

慰問品は、世界の各地から寄せられているらしいが、風変わりなものとして、一九五九年二月、ノルウェーの製氷会社が、氷三トンをガラス綿に包み、医薬品と一緒にトラック積みにして、ヨーロッパを南下し、フランス第一の港マルセイユから地中海を経て、北アフリカのアルジェリアを通過し、サワラ砂漠を横ぎり、一か月以上を費やして目的地のランバレネに着いたという。

それでも嚴重にガラス綿にくるまれた氷は、ほとんど溶けていなかったもので、氷を見たこともない多くの黒人たちは、非常に興味を示し、手を触れては目を丸くして驚いたり感激したりで、子供達は氷の上で嬉々として跳ねまわったという。

わが国からの慰問品も時々届くらしいが、その中に折鶴もしばしば見られるという。折鶴は、長く寝ている患者たちのためといって送られてくるらしいが、約四十種族にのぼる原住民の文化程度は、日本とはあまりにも違いすぎるので、せっかく心をこめて送ってくれても、優雅な折鶴に込められた“祈りの心”を理解できる原住民は、一人もないとのことである。それで単なる紙として役立つなら、むしろチリ紙のほうが遙かに実用的な慰問品になるだろう、と野島先生はかつてその感想を著書に記しておられるが、大いに考えさせられることである。

シュバイツァー博士は、一九五二年のノーベル平和賞々金で現在のハ病部落を新設した。そしてその主任医師に、日本人の野村実博士を任命し、治療にあたらせた。

シュバイツァーが新設した病院は、一般病棟三百五十床、ハ病患者病棟二百五十床であるが、その運営費用や職員への手当はすべて、シュバイツァー博士の著書の印税と、世界各地からの寄付金でまかなわれているという。

少し古い資料であるが、ここでの一九五九年度の新患総数は、四〇七八名で、うち入院手術を要したものの四六一名。この中の二〇七名はヘルニヤ（脱腸）であった。

黒人たちの病気で特に多いのは、回虫症、ヘルニヤ、性病で、全疾病の約七〇〜八〇%を占める。これに反し、虫垂炎やガンはほとんど無く、高血圧も非常に少ないといわれる。

ハ病の治療薬としておもにプロミン、ダイアゾン、DDSが使われている。結節の出るハ病は十七〜十八%くらいで、日本に比べると非常に少ない（日本では五〇〜七〇%）。つまり日本の患者よりも軽症者が圧倒的に多いことを物語っている。したがって日本と違って、ライ性禿頭病やライ性虹彩炎はほとんど無く、失明者も非常に少ないとのこと。

しかし、ハ病の患者は非常に多く、ガボン共和国だけでも推定一万人〜二万人といわれる。総人口五十五万人と考え合わせれば、いかに有病率が高いか想像できよう。病院での常食は、種々の野菜、サツマイモ、タロイモ（根

は土人の主食)、果物類、肉とミルクはカンツメで、また乾期にはオゴエ川でとれるコイ、フナ、ナマズなどの魚類、ワニ、サルなど獣肉が食卓に上ることもあるという。

さて、偉人シュバイツァーにもちよつと変わったくせがあるようで、その主なものの三つについて転載したい。一、生前、いかなる虫も殺さなかった。

蚊も蠅も殺さない。一マラリヤを媒介するアノフェレスという蚊にも、人間を刺さない種類の蚊もおるとして。

それで、患者には蚊帳を、看護婦らには下肢に厚い木綿の服装をつけさせた。博士自身も蚊帳をつるした寝台で休んだ。

二、石油ランプでの生活に徹した。

オゴエ川をへだてて対岸には電燈があるのに、シュバイツァー病院は電燈を使わないで、石油ランプに頼って生活した。その理由を聞くと、土人は電燈を使っていないので、職員と土人と同じ生活環境にありたいという主旨からとのこと。

しかし、病院には自家発電機があつて、手術室、レントゲン室、検眼室には電気があり、電気冷蔵庫も五台あるという。病院の医療面では、日本よりも五十年は遅れているでしょう、とこれは高橋功博士(シュバイツァーに絶大な信用があつて、黒人ハ病患者の診療に挺身している)の感想である。

三、四十八時間―二十四時間煮沸の水を使用。

雨期に大きなコンクリートの貯水槽に貯えた水を乾期に使用するが、このとき、飲料には、このタンクに貯えた水を四十八時間煮沸して常用させている。その後、二十四時間の煮沸で済ませるようにしたが、なぜこのように長時間煮沸するのか理解に苦しむといわれる(ちなみに普通は、百度(C)十分間の煮沸でほとんどの病原菌は死滅する)。

福音書ルカ伝(十六章十)

“小事に忠実なものは大事にも忠実である”

主要参考図書・文献

野島泰治著「らいと梅干と憲兵」昭和四十六年。



星と詩人(三)

―沢田徳一君を偲んで―

神子沢 新八郎

母の乳房

なつかしい乳房よ
喜悅のふところよ

あのやさしいひとみは

今も美しく

私の心の中に 輝いている

若者は 現在を視つめるとき

そこに 何があったか

そこには 尽きることのない

母の乳房があった

若者は 人生を

遠くふりかえってみるとき

過去 現在 未来に通ずる

母の血潮によるこぶのだ

その愛は 子のために

犠牲の道を歩まれたのだ

ああ 母の乳房よ

その徳を その真心を

神は 深く 汲み取ってくれるであろう

永遠の深き流れをたたえる

聖愛の真実を拝し

本日 健やかなることを祝おう

ああ 生命と愛のねぐらよ

お母さん

お母さん

お母さん ありがとう

この詩は、『近代日本キリスト教文学全集・詩集十三』
の中に選ばれたもので、沢田君が召される一年前の四月
二十八日、「誕生日に寄せて生命の記録」と共に、私に
書かせたものです。

「公園の桜は五分咲。天地は私の誕生日を祝福してい
る。実にすばらしい美しい光。咲き香る桜。私の靈魂を
愛撫するやわらかなそよ風。」

私は何もなくとも、誕生日の喜びを、主イエス様に申し上げ、世の始めより、永遠の昔より、神の子として選ばれたる確信と喜びを新たにす。

満三十歳の本日まで生かされてきたということは、実に奇蹟中の奇蹟である。私に与えられた生命の神秘、私の人生に与えられた特別な悲しみと喜び、私の複雑な個性の底に流れる神秘的な光、それは、永遠の実在者の選びと、神の能力のしからしむる所であり、約束された天恵の幸福である。

私の人生に、現在なお生き生きとして輝いているものはなんであろう。それは、海よりも深く、山よりも高い、この広い地上におけるただ一人の母の愛である。幾度か生死の境を乗り越え、三十歳の本日を祝うことのできたことも、母の愛があればこそである」。

この日記を読むと、キリストの出会いによる絶対的な神の愛と、お母さんの犠牲的な愛に対する、沢田君の限りない感謝と喜びが溢れております。

沢田君が救われてから、教会に出席し礼拝を守った印象を、七月十九日の日記に次のように記しております。

「私は初めて、教会という厳肅な宮に入った。その神聖な場所には、賛美と祈りが溢れていた。神の愛に生かされている私にとって、それは、最も記念すべき日であった。われ天国への希望と確信を、いよいよ新たにす」。

このように、彼の信仰は情熱の詩人らしく、聖霊の火に燃やされ、いつも教会の前列に坐って、賛美する時は

歪んだ両手で膝を叩き、祈る時は、「主よ、主よ！」と力を込めて、沢田君は見えない目を天に向け、愛する主イエス様だけを見つめつつ、賛美と祈りを捧げていた姿が彷彿として参ります。

今も生きておられる復活のキリストより、直接に御言と聖霊を体験した沢田君は、神の言である聖書に飢え渴いておりました。その頃の日記に、「江川兄よりマタイ伝六章を聞く、今日ほど御言に渴きを覚えたことはなかった。めまいがするほど御言を求めた。成沢兄より聖書を借りて抱えた」と告白しております。

その彼は、松丘盲人会で始めた点字を工藤兄に習い、点字聖書を自分の力で読もうと挑戦しました。しかし、胃腸が弱かったので、舌からも胃からも血が出て断念せざるを得ませんでした、その後、胃腸障害を起していた彼は、肉体的にも精神的にも大変弱って参りました。

聖霊に満たされ、肉の人から霊の人に変えられた彼の信仰も弱り、あれほど熱心であった礼拝にも出席せず、御言にも耳を傾けず、兄弟姉妹との交わりを、あまり好みませんでした。そして昭和三十年の秋、沢田君の身体は腸結核のため極度に衰弱し、烈しい下痢と腹痛を繰り返しておりました。

新しい年を迎え、春の訪れを感じる頃、彼の病状は悪化し、第一病棟の個室に入室させられました。私は彼のたつての希望により、不自由になったお母さんに代わって、尽夜の附添看護につきました。

病棟でお医者さんと看護婦さんの適当な治療と看護を受けるようになってから、一時的にも病状が落ち着いて来たのようか、再び元氣を取り戻し、彼の信仰はリバイバルされて、教会に来訪された先生や兄弟姉妹の訪問を喜び、聖書を読んで頂いたり、一緒に賛美とお祈りを共にしておりました。彼の病室は、いつしか教会となり、天国の饗宴となりました。

沢田君の最大の祈りは、お母さんの救いでありました。三十一年間、愛と生命を注いで育ててくれたお母さん。病氣になってからも、烈しい雨風の日、寒い吹雪の日、少年舎や不自由舎に、また、病棟に通い続け、身も心も捧げて看病してくれたお母さん。

そのお母さんがイエス様に救われて、天国で永遠の幸福を与えられるように祈り求めておりました。いつも私たちに、「母が救われるように祈って下さい」とお願いし、お母さんに対しては、「おっ母さんがキリスト様を信じるなら、私はこの瞬間、天国へ召されても悔いはありません」と語っておりました。

長い冬も終り、深い雪に埋もれていた松丘の高原にも、雲雀が囀ずり、陽炎が燃えて、復活の春を迎えておりました。その昭和三十二年五月、桜の花も散り始めた頃、沢田君のベッドに天国からの御使の車が、間もなく到着しようとしておりました。

沢田君の病氣が急変したため、私のほかに上屋敷兄にも付き添って頂き、尽夜兼行で看病に専念しました。お

母さんも地上で最後の別れになるかもしれないと思い、最愛のわが子のもとに通い続けました。

亡くなる前夜のことでした。日頃、親しくしておりました泉清子姉と、祈の友に手紙を代筆して下さった赤木良子姉と、その他、数名の兄弟姉妹も集まって、沢田君の愛唱聖歌五九五番を賛美し、お祈りしておりました。

目には見えねども わがそばにまして
つねに助けたもう 主ぞなつかしき
ところを備えて われを待ちたもう
きみにまみゆる 日ぞなつかしき

その時、彼は召される日が近いことを感じていたのか、「愛する主イエス様、わたしの母を救って下さい！」と最後のお祈りをしました。それを聞いていたお母さんが堪らなくなつたのか、「徳一や、母は必らずイエス様を信じて、お前と同じ信仰を持って天国へ行くからな、安心しておくれ」とわが子の枕下に泣き伏してしまいました。

沢田君はお母さんの約束の言葉を聞くと、長い間の祈りの重荷をおろしたように、とても嬉しそうに、「ハレルヤ！」とニッコリ笑って頷いておりました。

十六日未明、「新ちゃん！」と呼ぶ声に目覚め、沢田君のベッドに近ずくと、「背中が苦しい」と訴えるので、背中を軽く擦すっていると、突然、彼の体が私の胸にも

たれるように倒れて来ました。私は、「沢田君！」と何度も呼びましたが、答えはありませんでした。

上屋敷兄も急変を知って側に来てくれました。私は自転車でお母さんの所へ走り、上屋敷兄は看護婦詰所へ連絡してくれました。家内を連れて病棟に帰ると、お医者さんは最後の脈を取り終えておりました。お母さんが遠い鈴蘭寮から息せき切って駆けつけた時は、既に遅く臨終に間に合いませんでした。お母さんは愛するわが子の亡骸に取り縋り、声をあげて泣き崩れておりました。

息を引き取った時間は、午前〇時五十五分でした。彼はついに三十二年間の地上の生涯と、短い信仰生活二年半を終えて、ライの人生にピリオドを打って、勝利の中に天国へ凱旋しました。

夜が明けて、教会の工藤吉五郎会長が病棟に来られ終禱して下さった時、沢田君の顔はまだ眠っているようで、その口もとには微笑さえ見られました。そこには、恐ろしい病魔と戦った苦痛の跡はなく、主イエス様が与える平安を感じました。

沢田君のお葬式が終り、それから、約一カ月後の六月二十五日、お母さんは新しい教会で、弘前教会牧師、藤田恒男先生の司式により、生前の約束通りわが子の遺骨を前にしてバプテスマを受けました。

聖書に、「主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん」(使徒行伝十六の三十一)と約束されており、最も惨めで不幸な運命の母と子が、キリストの

福音によって救われ、国籍を天に移されました。最後に、沢田君が召される前に書き残した詩を紹介して終りたいと思います。

われ天がける日を待たん

おお われを救いし神は

いま まさに 全能の力と

栄光の冠をもって

われを迎えんとす

われ この日に備えて

何をなすべきや

ああ わが祈と賛美は

ここに 喜び溢るるなり

ああ わが意志と わが願いは

ただ 天国の主たる

神にまみえんことを

暁は いよいよ近し

われは 天国の門をたたく

アーメン 主イエスよ

速やかに来り給え

栄光の主を望みつつ

アーメン

通信歌評

成田 小五郎選

ない。四句五句とも丁寧な描写で、気持ちのゆきとどいた、よい一首となった。

加賀谷 幸蔵

十年前は胃を切り取りてこの夏は救急車で運ばる六十二年生きて

評 長い生涯の中の二つの出来事を取りあげ、結句に「六十二年生きて」としたのは感慨をよくあらわしている。三句の「切り取りて」のところは「切り取りき」か「切り取りぬ」とした方がよいと思う。

死線こえ癒えきし妻に手を引かれ治療にかよふ秋晴れの
下
評 死線をこえて漸く癒えた妻に手を引かれとし、単に「治療にかよふ秋晴れの下」としたのに万感がこもっているように思う、佳作というべきであろう。

佐藤 一祥

根岸 章

窓下に今宵鳴き次ぐ虫の声祈りにも似てこころにひびく
評 虫の声が祈りのようにきこえ、それがまた作者の祈りでもあることに注意すべきと思う、「窓下に今宵鳴き次ぐ」も素直な表現でいいと思った。

松 永 不二子

唾の娘と連れの黍売りの老婆故縁に掛けさせてねぎらひ
購ひぬ

評 「唾の娘と連れの黍売り」はそのままを詠んでいるようであって、状況がよく分かり矢張りうまいと思う。「老婆故」も俗にならず、ことわりにもなっていない。

ひと夏のまつりは去りてエヤドームの埃をあらう雨静かなり
滝田 十和男

評 青函博の歌かと思うが、歌には難しい対象だ。この歌はさまざまのことを言わずにエヤドームをとりあげ、その埃を洗う静かな雨に注目したのはよかったと思う。

岡村 健二

この町に移りきて老いし父と母日射しよき土間に菲束ねをり

評 気張ったところがなく、調べも言葉のあっせんも自然である。「日射しよき土間に菲束ねをり」と具体的によんだのが一首を成功させたものと思う。申し分の

ない一首で作者としてもすぐれた部類に入るものと言
って良い。

矢 島 忠

あたたかき妻の握手に応へつつストレッチャーにて手術
に向ふ

評 「握手」は時には俗になり兼ねないところである
が、この場合はそういう処を超えてうまく生かされて
いると思う。四句五句もそのままを詠んでいるのだろ
うが、簡潔である。

このたびの七首はそれぞれ力が入っていて感銘の
深い作品であった。

—お 便 り—

昨日は幸い天候に恵まれ気持ちよく一緒に歌会できまし
たことを感謝したい気持ちで一杯です。もう少し参加者が
あればよかったのですが、それにいたしましたも白樺の
皆さんの歌のよいのに刺激を受けたことをありがたく思
っています。いろいろご配慮をいただき厚くお礼申し上
げます。愈々寒い季節になりますので、充分ご自愛の上
お元気で過ごしの程を心から念じあげます。—後署—

昭和六十三年 十月十七日

成 田 小五郎

矢 島 忠 様
会 員 の 皆 様

短 歌

白樺短歌会

矢 島 忠

許されてベッド伝いに試歩をせり導尿バックを片手に持
ちて

思ひきり放尿の出来る日を持ち尿意もよほす痛みに耐ふ
る

足少しやせしや二ヶ月の入院に緩くなりたる皮脊が鳴る
二重にも盆の踊りの輪を広げ櫓の上に太鼓打ちにき

職員患者の別なく屋台に席しめて納涼祭の酒くみ交す
二度三度停止信号にかかる間にミニバイク幾台に追ひ越
されたり

松 永 不二子

拾ひたき思ひにかられぬ道端に紅沓えざえと散れる雛芥
子

事ありて故里に集ひし妹弟の五人の写真老いて似て来ぬ
おほむねは文通にてつながる妹弟愛六十年入園してゐし
われと

この宵を稀にひとりの時を得し心散らさず歌思ふべし
園の祭の納涼太鼓鳴り渡る杵き日故里にききしさながら

行けず来がたく姉妹老いぬせめてもと克明に便りす其の
節々を

加賀谷 幸 蔵

馬飼ひて夏には競ひ草刈し採草地は変り栗園となる

朝靄に包まれし栗園の彼方より懐っこく鳴く緬羊の声する

一斉に朝の静けさに時刻知らず「椰子の実」の曲は村ぬち流る

道すがら桑の実をとり口にせりむさぼり頬張りし幼なき日が顕つ

年を追ひ齒の損なひが著くして六十路初めですべて義齒なる

六十路初め胃なく齒なき吾五体一病息災とも人は言ふなる

ゲートボールに勧めらるるを断るに心の隅に若き残りて生産者側に明るき条件一つなし鉢巻姿に凜々しさ見えず

(米価審議会より)

おしなべて車社会の世となりて過疎わが村も朝夕はラッシュ

朝々に人等は車で田を見舞ふ吾は徒歩なり鋤を肩にし

晩秋近郊詠

滝田 十和男

北に棲む小鳥の群れの移りきて晩秋の森に声なく動く
雨ながく続きし夏の名残かも森のどの樹も紅葉づるなし
陽溜りの穏やかなれば往く丘に時ならず吹く肌を刺す風
よき日和ゆえに表に出できしがさすがに風の冷たさに遇う

銀杏の実の散らばりて落葉積む無住官舎に日の翳りはや葉はすでに半ば落ちたるアカシアの木末にあかるく森をそよがす

海を見てあればあくまで紺碧のむつ湾をゆく船一つなし森の下往く自動車の途絶えたる間の閑けさや逝く秋のもの

唐松の葉の舞い落ちてたまたまに車の屋根に載せて行くあり

志かくあるべしと諭すがに雪を頂く山澄みわたる

見馴れたる山の秀に降る雪の白日増しに裾を広げゆくなる

見納めに巡りてきたる森の道秋深まれば遇うひともし窓を閉じし校舎のなかを漏れてくる児等のこえ今日も雑然として

吾が好きな道の一つに森かげの校舎の傍を辿りていたり逝く秋の虚しさ校庭の相撲場に人影もなく風吹き抜ける樹の梢を風鳴りてゆく丘に見る平岡団地みな暮しよく

たまたまに電動車にて来し丘は秋の終わりの空高く澄むコスモスの残りの花を揺らしめて坪庭の家の窓閉じしまま暗がりの車庫の中より声かけてきぬ住宅の角曲がるときフェンスを高く張りたる畠中に作るりんごの実の紅きこと坂道をのぼり来向かう自動車のゆるゆる影もうごく石塀坪庭にピラカンサスの実は熟れて此の家もまた昼閑かなる

俳句

欣求俳壇 (九・十月)

村上三良選

田山陽司

四阿のそこはかとなく秋めけり
半世期園に棲みをり盆の月
久々の歩き疲れや赤とんぼ

志村満

晴れしまま無事に暮れたり今日厄日
耳たててか細き虫の声聞けり

平山幸運子

弱視にも夢あり鉢の菊作り
作柄を見廻る畦の冷やかに

俳句

みちのく集 (九・十月)

佐藤静良選

田山陽司

納骨堂盆燈籠を吊りつらね
三界に帰る家なし盆の月
虫の音に心やすらぐ夜々なりし
消え残る衰舎の灯虫時雨

わが庭に虫の音夜毎増すばかり
雨降りて色美しき山紅葉

志村満

退院は何時リハビリの汗拭う
体育の日の背をのぼし病ひよし

平山幸運子

九・十月句会

慰霊碑の草取り奉仕にぎやかに
療養の供物乏しく月祀る

平山幸運子

涼風のこの四阿の去りがたく
月供物空しくありし雨月かな

田山陽司

父母を憶ふ香たき秋彼岸
故郷を想わせている鰯雲

豊崎小石

虫すだく庭にむかいて深呼吸
こおろぎの声も絶えたる夜の雨

川柳
明鏡集（九月）

鈴木可香選

高野明子

日曜日ラジオ相手の一人部屋
きびきびと仕事が見える介護員
風邪の床友の見舞の甘い梨
親切なナース母めくうしろ影
頭の下がるお世話で癒える風邪の床
目の中がふるさとなる稲の波
耐えぬけば幸が待ってる人生路
介護員返事明るく頼られる

遠藤芳富

病み上がりゆっくり歩巾確かめる
陰口をされる自分に言い聞かせ
病人の笑顔お金で買えぬ幸
見て見ない振りする人の冷たい目
感情を棄てる茶柱揺れている
病床の生活へ片目でも欲しい
幸せは誘導いらぬ杖の音
茅部 ゆきをを
妻にさす目葉大きな口を開け
療養も五十余年の秋桜

（佳）

お隣りの菊を貰って仏の日
主義主張あろうか庭のかたつむり
今日無事にすごした明日へ茜雲
帰らない一人へ夕べの灯がともし

太田千

便利でも温もりが無い肩叩き
食べるものすべてが美味い快復期
人生の夢を病魔にさえぎられ
路地に咲く花の素顔が美しい
相槌を気軽に打てば誤解され
いい汗をゲートボールで病友等かき

大橋やす

十五年振りの再会夜も更け
十五年振りの背友と流し合う
泣くなよと言われ手を振りパスは発ち
逢いたさの想い叶って幸に居る
荷を解けば友の真心転び出る
秋さくら今日の幸せ嬉しくて

猪狩子面坊

友情の寝冷えさせまい夏布団
すまなさは早や老眼の父で会い
幾とせをふすまに祖母の坐り臍
コスモスの園にすがしく蝶が舞い
折りからの雷雨へ宿る地蔵堂

鎌田娘雀

（佳）秋

雨上がり一と際冴える虫の声
秋日和青函博へ足が伸び
秋日和畳を叩く音聞こえ
青函博世紀の文化へ目を見張り
秋日和オリンピックへ茶の間湧く

（職員）奈良やゑ

県民の怒りと不信難工事
陣情十五年の汗を無駄にして
煮ても焼いても庭でつくった茄子の味
風鈴を騒音と聞く気の乱れ
忙しく友を訪ねる帰省の子

平山徳生

夢追って浮かれて買った宝鑑
介護員我が子のように話しかけ
金も名も無くて残るは夫婦愛
晩酌をのどを鳴らして飲む男

（選后感）

今集では高野明子さんの作品が全体
に揃っていた。茅部さんの妻にさす目
葉は大きな口を開けが面白い表現で生
きている。遠藤さんの片目でもほしい
の上五これ程の生活は病床のと句語を
替えた。大橋さんの二句目座五は友と
流し合うでよい。猪狩さんの蝶が舞い

の句、上五咲ききそうは何の花か不明、秋のこととてコスモスとした方がよい。

来年は私も満八十五歳になり、作句歴も満七十年になるので、名古屋川柳社と奈加川柳作家連盟で私の句碑を

名古屋市北区大曽根町三丁目常光院境内に七十年記念の碑を建立して下さることになった。まことに有難いことです。いまの体調なら九十歳までぐらひは痴呆症にもならないと思つたので頑張ります。茅部さんが療養生活五十余年

になるといふ。八十四歳で、健康で、全国の吟社へも毎月三十余吟社へ創作をお送り出来る私は幸せ者と感謝しています。来年も皆様と共に頑張りましょう。

九月句会 北柳吟社

宿題「虫」 藤 久悦 選

前 抜

昼寝して夜を働く夜盗虫

嫌われる虫の掟めか生命燃え

虫食いのりんごに残る甘い味

注意していても雷を虫が食ひ

泣き虫も殻を脱ぎ捨て飛んでゆく

舗装路に出たみみずの干からびる

蝶になる毛虫は人に嫌われる

虫の音に亡友の声聞く深い夜

亡き人を思い出させて虫が鳴く

虫が食う亡母の大事な形見分け

墓地延びて昆虫住家又追われ

一人部屋美声にうっとり虫の音

五 客

独り言のように聞こえる虫の声

娘 雀

聖 一

徳 生

久五郎

清

ゆきを

青森

聖 一

久五郎

や す

千 秋

や す

むつ市

清

だんまりの夫婦喧嘩に虫の声

ふるさとの空に似てくる赤トンボ

虫祭り恐竜もでる北の街

虫下し飲んで下したいやな夜

人 位

虫が鳴く夜道で秋の風を知る

地 位

己が殻背負いでんでん虫散歩

天 位

十二階テイクで虫を聞いている

宿題「船・舟」

前 抜

幼な子の願い海まで笹の舟

舟唄を聞いて安らぐ浜育ち

見える舟自衛も出来ぬ潜水艦

朝の浜出てゆく舟の無事祈る

命運がつきた狸の泥の舟

床の間へ倅せ積んで宝舟

青森

久五郎

娘 雀

草 兵

草 兵

草 兵

草 兵

草 兵

草 兵

草 兵

草 兵

草 兵

草 兵

人命を救う手際のゴムボート
月影も揺れて涼しく漕ぐ二人
磯舟の父子朝飯前の漁
船が来たときだけ活気づく離島
難かしいポーズ見せてるたらい舟
たらい舟漕いで旅情を豊かにし
力なく舟引き上げる日の不漁
広告で子らと一緒に舟を折り

五 客

郵便船便利屋になる島の足

子面坊

〃

明子

久五郎

久悦

〃

千秋

娘雀

明子

磯舟でイカ釣った日の記憶あり

腕の舟一寸法師のでかい夢

笹舟も知らない子らの塾通い

沖へ出た舟を案ずる深い霧

人 位

孫の描く小舟今にも走りそう

地 位

帆船が二つのどかな海にする

天 位

貸しボートゆらゆら恋が浮かんでる

ゆきを

草人

千秋

〃

やす

青森 久五郎

昭和六十三年度 老人慰安文芸

主催 親睦会

杉野草兵選

謎々 課題「飛行機雲」とかけて

佳 作

記憶と解く 心はだんだんうすれてくる

畠山礼治

今藤留七

「なめくじ」と解く 心は通った道が白く跡が残る

大橋やす

清掃された部屋と解く 心はだれが見ても気持が良い

ヒステリー女の実顔と解く 心ははればれた時でなければ見られない

相馬みよ

上げ花火と解く 心は長くもたない

高橋みね

秋晴れに雁の群と解く 心はあつという間に流れてゆく

沖野ふで 神谷金次郎

狙われた財布と解く 心は少ししたたらどちらもなくなる

茅部 ゆきを

昔の中学生の帽子と解く 心は白線が美事

槻木 沢 きや

幼児のらく書と解く 心は時には絵模様に見える

木山 謙 治

口争いと解く 心はいつまでもあとへ残る

堀川 ちえ

暴走族と解く 心は飛行（非行）に走ってよこしたがる

川浪 なん

野球場のホームランと解く 心は声援（清煙）があがる

赤石 秀 雄

若者がみる夢と解く 心はどこかロマンがある

成瀬 豊

雪に付いた足跡と解く 心は姿は見えなくても通った道筋がわかる

中村 作 蔵

金魚のフンと解く 心は一線を引いて進む

藤村 恭 造

シャボン玉と解く 心はきれいに見えても風に流れて消える

猪狩 巖

母の瞳にハネムーンと解く 心は華やかな影にも不安が残る

佐藤 祥次郎

或る夜の夢と解く 心は故郷の空へつながってゆく

千葉 武 夫

初冠雪の富士山と解く 心は青空に白さが映える

滝田 十和男

まだ生きていた女大学と解く 心は何処までも黙って主人に随いて行きます

佐々木 ふよ

五 客

神父さんと解く 心は信仰（進行）によって残るものがある

小綿 貞 夫

質ぐさと解く 心は時が立つと流れてゆく

竹沢 つるよ

高飛びの記録と解く 心は低く飛べば出来ない

高野 あきよ

思いつめた初恋と解く 心はただ一すじ

中村 武 三

貴金属店の陳列品と解く 心はあまり高くてながめるだけ

松橋 新一

人 位

雌を追うタヌキと解く 心は音もなく尾を引いてついてゆく

佐々木 文 夫

地 位

ダースで飲むビールと解く 心は出して進む

和田 渚

天 位

忘年会と解く 心は最初は良いが後は乱れる

ものはづけ 課題「腹の立つ」ものは

佳作

嘘ついでのがれた主人
追いついてゆく車
シルバースーツに座っている若い顔
恋愛中の猫の声
無断で手折ったコスモス
盗まれた唇
まじめな話し中のダジャレ
夫婦喧嘩を見せつけられた男やもめ
売払った土地が三倍に売れた話を聞いたとき
満員電車で踏まれた足
丹精して育てた作物を盗まれた時
並んでいる列に割込む無責任者
妻から見た内縁の妻
真夜中の間違い電話
蒔きたての苗床をもぐらに荒らされた時
車の前の千鳥足
テレビのラブシーンを見ていた時の停電
国会で居眠りしている代議士
愛犬にかまれた手の痛み
ハンセン病に対する偏見

神谷 金次郎
畠山 礼治
藤村 恭造
和田 渚
猪狩 巖
松橋 新一
赤石 秀雄
中村 作蔵
成瀬 豊
中田 常蔵
榎木 清二
小綿 貞夫
高橋 みね
今藤 留七
千葉 武夫
並木 かよ
太田 三八
目時 てるえ
相馬 みよ
佐藤 祥次郎

五客

友にホンツケなしと言われた時
若い女とかけおちした亭主
二日酔を責める妻の顔
予告なしに酔っぱらいを連れて来る夫
今掃いたのに掃き直す妻
人位
未亡人宅の回りをうろつく猫のさかり
地味
ある日の年上の妻の口
天位
遣っても遣っても減らないオラエの札束の山

竹沢 つるよ
高野 あきよ
遠藤 芳富
木山 謙治
菊地 かつみ
佐々木 文夫
茅部 ゆきを
滝田 十和男

前号挿入

一七頁上段一行目
血族の契り断ちつつ癩を病む独りの媼が恋ふる古里
同 十行目
和が一生の善意と思ひ腕の皮膚を癩菌培養のために捧げぬ
同 一二行目
幼くて癩病む謂れ問いつめて母を泣かせし夜の天河
同 下段三行目
偏見の根深き癩園に光呼ぶ如く来ませり皇太子両殿下
二十頁上段十行目
連休に外泊者多き泌尿器科のトイレに空の貯尿袋並ぶ
同 上段十四行目
五分粥をさしめてよそひてくる度付添婦君も口を明けるる

あの遠い日から (五十三)

菊地 盈

謝った恩師(上)

須釜校長の温情で、落第という憂目を見ずにすんだ私は、昭和十年四月に、五年生へ進級することが出来た。私にとっては幸運な進級でもあった。だが父の頭には、四年の学課も碌に終っていない子供が、どうして進級が出来たのかといった考えがあったので、教科書など、何の準備もしては呉れなかった。野口先生より「落第はさせない」と、はっきりした回答があっても、父は素直に受け止めてはいなかった様である。

というのは、五年に進級すれば当然本校へ行かねばならず、そうとなれば、骨を削った痛んだ足では、到底五軒もある本校へなど、通う事は出来ないとも、父は思っていたのである。

そういう父も、私が何処へも行かず、唯家の中で、遊ぶ相手もなく一人佗しく毎日を過ごしている様子を見て、何んとか学校へ通わせたいと、思っていたのである。

私が、どうにか松葉杖に頼らず、自力で歩行が可能になった或る日、父は分校に野口先生を訪ね、私の教育の事について伺った。父の意図は、本校へは無理なので、出来る事なら分校に預かっていただき、野口先生より面

倒を見て貰いたい、という考えがあったからである。私に勉強させるとなれば、その方法より道はない、と父は思ったからである。

勿論野口先生も、実状を承知しているので、無下に断る事は出来なかった。だが、自らの担任を終えた本在校生を、たとえ一人であろうと、安易に引き受け、自らの負担を更に重くしたいとは、野口先生も考えてはいなかった。第一そうしたケースは分校では始めての事でもあり、野口先生自身、或る戸惑いを覚えていたかも知れない。

父からの、たつての頼みを、黙って聞いていた先生は、「話は充分私も承知致します。だが僕一存で御返事を申し上げる事が出来ないのです、明日にでも校長とも相談し、その上で御返事をしますから、二、三日待って呉れませんか」

そう言って即答を避け、父を戻した。

一人で四学級を担任する若い野口先生にとっては、毎日が過重であり、この上余分に一学級増える事は、決して望みとするものではなかった。前例もないだけに、出来るものならきっぱりと断ってしまいたい気持でおったかも知れない。

約束通り野口先生が校長に伺いを立て、返事を持って来たのは、それから二日後の夜であった。相変らず酒を口にしていた。紅潮した顔で威勢も良かった。校長に伺いを立てた結論は、事情が事情なので、分校預りも止むを得ないだろう、という事であった。尚野口先生の話は

続いた。

「しかしだ、僕としては分校へ通って貰ってモだ、正実君を特別な扱いは出来ないよ、無論時間割りを作るつもりはない、授業はすべて自習でやって貰う事になる。本当を申せば、僕としても精一杯だ……」

いわば野口先生の言ひ分は、理解はされるが現状では直接教える事は出来ない、それで良ければ明日からでも分校へ来なさい、不服なら来なくとも良い、と言わんばかりの冷淡な返事であった。勿論この返事は、野口先生一存の考えで、須釜校長の意志とは無関係と父は思っていた。

いうなれば、野口先生の頭の中には、同情よりも、余分な生徒を面倒見ても月収が増える訳でもない、といった待遇についての不満もあったろうし、おまけに、授業料も払えない、貧しい家の子供である、といった蔑視の感情もあったので、わざわざ飲酒をして返事を持って来たものである。(当時私の村では、授業料を一人につき年間三円、三人通えば、三、二、一の割合で六円納めなければならなかった)

言いたい事を、はつきり話した野口先生の言葉に、父は何も返す事はなかった。本来ならば、腹を立てそんな事なら敢えて頼まない、といって断るところだろうが、今の父にはその気魄さえなかった。前例もない事を無理にお願いする立場であって見れば、直接指導を受けなくとも、学校にさえ通っていれば、遊ぶ相手も居り、家の

中でしょんぼり過ごしているより、余っ程ましであると思っていたからでもある。

「余計な者だからナイ……」

何か言いたかった様だが、父は一言苦しそうに言っている言葉をつぐんだ。そして改めて、それでもよいからと言って頭を下げた。野口先生も後は何も言わなかった。

貧しかった父には、酒を賣う金さえ持ち合わせもなく、これ程重大な頼み事をするのに、野口先生に出す一杯の酒も用意する事が出来なかった。以前の父なら、どうしてこの場をお茶で濁す事など、到底出来る性格ではなかった。戸棚の中には、白河の地酒である「白陽」とか「千駒」とか、数種類の酒瓶が立って居り、二人と揃えば、決まって父は酒を汲み盃から零れる酒の臭いで、囲爐裏の周囲はいつもむせ返る程であった。酒呑みに接して酒を口にしない父など、以前ならとても想像されなかった。それ程父は義理固いというか馬鹿正直というか、他人に対して見栄を張りが、甘い側面を持っていたのである。

そうした父であったが、矢張り貧乏には勝つ事は出来なかった。もう少し若かったら、働いて収入の道も拓けただろうが、最早や詮無い事である。

野口先生の吐く酒の臭いを、この時の父はどんな気持で嗅いだものであろうか、往年の父を覚えていただけに、父の気持が想像されるのである。酒も大分さめ、

「明日から学校へ寄越す様に……」と言って、野口先生は黒い緒の下駄を履き、吾が家から出て行ったのは、

山の稜線だけが、夜空に浮かんで見えるだけの、辺りは暗に包まれ風の音さえ聞こえない静かな夜であった。

色々な曲折はあったが、愈々明日より分校へ行ける事に決まった私は、急いで二年前兄が使用した古い教科書を、仏壇の下の引き出しを開けて探した。読本、修身、地理、理科、国史、書方、之が五年生の国定教科書の主なるものであり、唱歌だけはなかったが、全部揃っていた。私はその全冊を鞆に詰めた。しかし必要であらう肝腎のノートは、一冊も持ち合わせてはいなかった。

四年生の二期を、僅かに齟りかけただけで入院、それ以来学校とは縁のなかった私は、厳しい状態の中の、いわば居候的學生にすぎなかったが、学校へ行けるという事で、心は有頂天になっていた。長い月日、学校へも行けなかった自分の惨めな境遇を、誰よりも情無く感じていただけに、私は嬉しさで一杯だったのである。

私は、野口先生がきっぱりと、父に申しした「授業は自習で」又「一時間割を作って直接教える事はない」といった条件を、本当はあまり気にはしていなかった。子供心に唯学校へ行けさえすればよい、と単純に思っていたので、大人である父が深刻に受け止めた事とは大分相違があったのである。それというのも、前年お寺に居った時、和尚の子供で私より一級上の、肇という子供から「来年は使えるから」と言っ、使用済みの、五年一学期用の「研究大全科」を貰い、大事にして持っていたからでもあった。

先の関口という先生も、又野口先生も、何故か全科を見る事を好ましく思っていなかったたので、その頃部落の子供達は殆ど全科を持つ事はなかった。もっとも一冊が五十銭もする全科を、誰もが、気軽に買って貰える状態ではなかったからかも知れない。

その全科を、貰い物ではあったが、私は持っていたので、直接先生が教えて呉れなくとも、自習位は何とか出来ることだった、自信めいた安心感があったのである。

こうして私は、前年骨髓炎を煩い、入院して以来七ヵ月振り、懐しい分校の門をくぐった。七ヵ月という空間は、日数にすればそれ程長い月日ではないだろうが、当時の私には、幾年も経った様な長い月日に思えた。一年生は二年生になって居り、机を並べた同級生の姿はなく、教室内の雰囲気は、丸で別な学校に入校した様な、そんな錯覚さえしように、私の目には映った。

授業が始まると、野口先生が、私の事について分校預りとなつたいきさつを、簡単に話して私を紹介した。後輩達と言ってもみんな同じ部落の子供達である、暫らく振りの私の登校に、みんな懐きそうであった。

私は一番後ろの、漆を塗った様な、黒ずんだ傷だらけの古い机に、一人だけの席が設けられ、神妙な気持ちで腰掛けに座った。同じ教科書をめくり共に競い合う相手も居ず、何か佻しい自分を感じない訳にはゆかなかった。

全科だけを頼りに、毎日が自習という味気のない課程

を過ごしたのは、確か二カ月位の期間であつたろうか。まだ夏休みには間があつた様に記憶している。

物好きで遠慮深く出しゃばり屋だった反面、自分では人一倍正義心が強いと思つていた私は、或る日下級生同志の争いに口を出し、一方の味方となつて相手を泣かした事があつた。この行為が、相方の話を聞こうとしなかった、野口先生の勘を刺激した様で、生意氣、という風に受け止められ、忠告とは思われぬ叱正を浴びせられた事に、私は、我慢のならない憤りを覚え、分校に暇を告げようという氣を起こさせたからである。

「君は本校へ行く事になつてゐるんだ、分校生でもない君が、上級生らしい顔をして、分校の出来事に余計な口出しをするな。」

興奮していたか、それは鋭い口調であつた。まともから、私に向つて怒鳴りつけた野口先生の言葉に、喧噪だった休み時間の教室内も、丸で水を打った様な静寂さに戻り、心配そうに私の方を見て顔色が蒼白になつた生徒

身延のかがり火 (三十二)

——八病の救聖僧綱脇上人伝——

野中武祉

綱脇上人が身延へ戻ってから、三日目のことである。

名古屋へ行つてゐた花井も、深敬病院へ戻つてきた。花

さえ出る程であつた。

憎悪に充ちた横目で、如何にも私を蔑す様に睨みつけ、教員室へ足早やに姿を消して行つた、野口先生の後ろ姿を、呆然として見送つた私は、その時子供心にもむらむらと沸き立つ反抗心に燃えたのであつた。一年生からの大恩ある先生ではあつたが、抱いていた尊敬の念も、信頼していた心も一変に掻き消え、悔しさに胸を震わせたのである。

私は矢張り厄介者であり、分校には来て欲しくない生徒である、と普段から野口先生の言動から承知していた私は、之がきっかけとなり「よし明日からは本校へ行く」という決心を起こせたのである。

授業の鐘が鳴る前に、私は、机の中の自分の物を全部鞆に詰め、綺麗に整頓してから、後輩達に「明日からは来ないよ」と別れを告げ高ぶる感情を制止出来ぬ俛、授業時間の途中ではあつたが涙をこらえ一目散に下校したものである。

井は相変わらず寄付集めの出張をしていたのである。

久しく会わない間に、花井の頭髮が伸びて毳栗状となり、顔も首筋も真黒に日焼けしていた。着ている衣も、土埃にまみれひどく汚れている。いかに熾烈な寄付集めをしてゐたかが、その様子から良く解る。

花井はなぜか女の子の背負つてゐなかつた。

「子供をどうしたのだ？」

不審な面持ちで綱脇上が聞いた。

「名古屋の妙法庵の庵主、深見浄園（おきよ）さんの所で預かって貰ったのです。名古屋へ寄付集めに行った折り、深見尼僧さんの所へも寄付を頼みに寄りました処、尼僧さんは気持ちよく寄付して呉れはりましたな。それから、わしが背負っている赤子の母親はおるのか……と尋ねられましたので、病死しておりません。と事情を詳しく申し上げますと、尼僧さんはえろう同情はりましたな。ライ患者を救う為めの寄付集めを、赤子を背負ってするのはさぞかし大変な事でありましょう。よろしければ、私がお子をお預かり致しますよう。貴方は身軽になつて寄付集めに専念なさいませ、と、えろう熱心に申しますので、わし、ついその有難いお言葉に甘えてしまいましたんや」

「そうであつたか……」

花井から説明を聞いた綱脇上人は、一度だけ会つたところのある温厚な風貌の深見尼僧を脳裡に想い浮べ、さすがは慈愛深い立派なお方だ……と感じ入つたことである。

「しかし、尼寺で赤子を預かつて何かと困るのではなからうかな」

綱脇上人が尼僧を思いやうて呟くと、

「ご尤もな事で……」

と花井は言う。

「実は、深見尼僧さんが赤子を引き取ると言つた時、尼僧さんのお弟子達が顔色を変えてこう言いました。お

師匠様、赤子を預かるなんて、とんでも御座いませぬ。

この尼寺は野中の一軒屋ではなし、赤子の泣き声が周辺に漏れます。近所から尼寺に赤子が生れたと、あらぬ噂を立てられましょう。お師匠様の親切なお心は尊いものと存じますが、しかし赤子を引き取る事だけはおやめ下さい！と、お弟子方が猛反対致しました。ところが、深見尼僧さんは、私が全責任を持ちます！と云うて強引に赤子を胸に抱き取られたのであります……」

花井は説明し乍ら、切れ長の臉を不意にしばたいて涙ぐむ。尼僧に対する感謝の念が、改めて高まつたのであろう。

(6)

晩春の陽が仄かに入り込む清々寺の一室に綱脇上人は籠り、寄付帳の整理に余念がなかった。そこへ作業衣を上品に着こなした一人の紳士が尋ねて来た。

中肉中背の紳士は、小林孝三という貴族議員で、身延山山林部監督の役務についていた。綱脇上人らが寝泊りする清々寺の監督をも兼務して、定期的に持ち場の見回りをしていたものである。この日も、持ち場の見回りに来たのであつた。

「綱脇さん、患者に食べさせる野菜を入手するのも大変でしょう。ここは不便な所ですからな。この近くにある総本山の杉苗仕立場用の空地を、貴方に明け渡しますので病院の農園として使用しなさい。それから鷹取山の急斜面に繁る雑木を、病院の燃料用に目立たぬよう徐々

に切るのもよいでしょう」

見回りに来たついでに、小林議員が言った。

救ライ事業に深い理解を寄せる総本山の豊永法首から、綱脇上人に協力してやって呉れ……と小林議員は言われているらしく、何かにつけて便宜を図って呉れた。

その小林議員に接するにつけ、いつも頭の下がるよう思いを禁じ得なかったことである。

「折り入って小林さんをお願いがあるのですが……」
日頃お世話になっている小林議員に、綱脇上人が改まって言う、

「どのような事ですか？」
小林議員は大らかに身構えて聞く。

「実は、もっと多くのライ患者を救済したいと思っておるのですが、それにはどうしても病院を拡張しなければなりません。しかし病院を拡張するには多大な経費が入ります。現在各地の寺院から集めた浄財で施設を運営致しておりますが、その財源も頭打ちで病院を拡張するだけの余裕がありません。今後は民間人からも浄財を新たに集めるなどして、財源を大きく致さねばなりません。

小林さんは顔も広いことでもありますし、寄付に応じても呉れそうな民間の知人がおりましたら、私が寄付集めに参りますので、是非紹介状を書いて戴きたいのですが……」

と、綱脇上人は要望を率直に述べた。一般の民間人から、浄財を積極的に集めたい……という意欲を綱脇上人に抱かせたのは、甲府財閥の巨頭と謂われる若尾家の

主であった。

若尾逸平は先日寄付を頼みに行った時、快く寄付に応じて呉れた。その事によって、民間人でも救ライ事業を理解する者がおるのだ……と、綱脇上人は改めて教えられ、また暗黙の内に励まされもし、勇気づけられもしたのである。

「よろしいですよ。紹介状を書いて差し上げましょう。ただし私の知人は東京におりますが、構いませんか？」
と小林議員が言う。

「構いません」

と承知すると、小林議員は即座に紹介状を書いたものだ。

綱脇上人は小林議員が書いて呉れた七本の紹介状を持ち、二日後に東京へ発った。

東海道線を走る東京行きの列車の中は、多勢の乗客の人息れと煙草の煙りとでむんむんしていた。

列車に乗り込んだ彼は、すぐに一厘講のパンフレットを乗客に配って歩き、やがて配り終ると快走する車中の中ほどに立ち、

「皆さん、私は日蓮宗の一介の僧侶であります」

と、大声を張り上げて演説を始めた。民間人を対象にした新たな浄財集めの開拓に、彼は果敢に挑んだのである。

「皆さんもご承知のように、日本の各地に世間から見捨てられたライ患者が、乞食同然の暮しを余儀なく致し

ております。私はその患者を見捨てることが出来ず、身延山に深敬病院を創り救う事業を手掛けておる者であります。ただ今お手許に配布した一厘講の趣意書をご覧下さいまして、ご賛同戴ける方は一厘講一口分三銭の寄付をして戴きたいと存じます。寄付は何口でも構いません。尚、振替番号が趣意書の末尾に記してありますので、ご送金下さいますようよろしくお願い申し上げます」

熱意を込めて呼びかけたが、救う事業と云っても当時の人々には馴染みのないもので、また社会に善意を施すというような一般的な意識も薄く、多勢の乗客はただただ薄汚れた衣姿の綱脇上人をうさん臭そうにじろじろと眺めるだけであった。

誰でもいいから何か質問をしてくるなり、或いは僅かでも寄付をして呉れる者がおれば、この場の格好がつく。だが乗客達は妙に沈黙して煙ったそうにするばかりで、そんな気配を微塵も見せない。

これでは引っ込みがつかない。この場をどう収めたらよいか……綱脇上人は演説をしたものの、收拾がつかなくなつて列車の途中に突っ立ったままいささか困惑してしまつた。

丁度その時、列車の奥の入口に近い座席に坐つていた中年の紳士が、すくっと立ち上つたかと思うとこちらへ寄つて来た。

「今、貴方の演説を聴いておつて、私感激致しました。偉いことをやって下さるお方がおるものだ……ととは

と感服致した次第です」

山高帽を手に、羽織、袴姿の紳士は傍へ来るなり言つた。そして更に、

「これは僅かなもので貴方の事業の九牛の一毛にもなりませんまいが、私の志です、どうかお受け取り下さい。救う事業は並み大抵のものじゃありますまい。お察し致します、余程身体を大事にされて、事業に当られますように……」

上品な紳士は励ましを言い乍ら、真新しい五円札を差し出す。

引っ込みのつかなくなつていた綱脇上人は、これで助かつた！という思いの方が強くて一瞬紳士に返す言葉もないような有様であつた。

「さあ、受け取つて下さい」

綱脇上人の手に紳士は五円札を握らせる。

「ご厚志有難うございます。つきましては、ご尊名をお聞かせ頂けないでしょうか？」

ようやく落着きを取り戻した綱脇上人が尋ねると、

「いやあ、なんのなんの、名前なんぞ名の程の者じゃありません」

紳士はそう言つたかと思うと、元の座席へ悠然と歸つて行く。綱脇上人も同じ列車の一座席に身を委ねてくつろいだ。そして今しがたの見知らぬ紳士の行為が何にかにつけて有難く思われ、心の中で深く感謝したことである。

列車が静岡駅に近づくにつれ、下車をする人々がそわそわと網棚から荷物を下ろし始める。ふと気が付くと、先程の紳士も紫色の風呂敷包みを網棚から下ろしている。どうやら静岡駅で下車するのであろう。その様子を見た綱脇上人は躊躇なく座席を立ち上ると紳士の傍へ歩み寄って行った。

「先程は誠に有難うございました、ご尊名も伺がわずにお別れするのは、どうにも残念でなりません。ご迷惑ですが、是非お名前をお聞かせ願います」

と、再び声を掛けると、

「なーに、静岡の在に住む杉田というつまらん和尚です」

紳士は苦笑しつゝ、応える。その名前を聞いて綱脇上人は驚いた。

「えっ、貴方が杉田日布上人ですか？」

「ええ、ええ、そうです。学も徳もないつまらん和尚で……」

杉田上人はそう言つて軽い声をたてて笑う。

杉田上人と言えば静岡県池田在の本覚寺の住職で、当代稀れに見る高德の師として日蓮宗門においては名の通った人物である。その名前を綱脇上人も知悉していたが、じかに対面するのはこれが初めてであった。

しかも列車の中という意外な場所、高名な僧侶に出合うとは……。この奇縁に彼は今更に驚きもし、感激をもしたのであった。

「いずれ改めてお伺い致したいと存じます。若輩の身ではありませんが、のちのち迄よろしくお願い致します」

綱脇上人が慇懃に頭を下げると、

「ええ、ええ、又そのうちに送金して上げますよ」

羽織袴姿の杉田上人は、淡々と応え乍ら到着した静岡駅のプラットホームへ降りて行った。

一ちなみに、この杉田上人は、後に第十八世身延総本山の法首に出世され、綱脇上人が運営する救ライ事業に一角の援助を寄せたものである。

(つづく)

園 日 誌 ○印 自治会

十月

1日 藤原偉作先生来園(カトリック教会)

2日 藤原偉作先生外一名来園(松丘

4日 高橋博先生診療援助(眼科)他

ランドルヴィル神父来園(カトリック教会) 他五回
白川順子氏来園(カトリック教会) 他三回

聖生会)
松本正俊司祭、冲縄教区諸魂教会来園(聖ミカエル教会)
園長岩手病院へ診療援助

- 六回
 “ 滝田順一先生診療援助（耳鼻科）他八回
 “ 安野嘉彦会長、蝦名直四郎先生外五名来園（大理教会）
 “ 新任の高橋恒治事務長、榮軒の伊藤兎事務長自治会へ挨拶
 5日○宮城県人会里帰り（二泊三日）
 “ 福士六郎先生診療援助（内科）他三回
 “ 堰野端けい子氏来園（カトリック教会）他五回
 “ ○新任の柴田かつ子総看護婦長、退任の小枝幸総看護婦長自治会へ挨拶
 “ ○伊藤事務長、小枝総看護婦長離園
 6日 秋田県ハンセン病援護協会秋田県人会慰問
 “ 市川美雄先生外一名来園（松丘聖生会）
 “ 佐藤忠男司祭来園（聖ミカエル教会）他三回
 9日 中山年道先生来園（松丘聖生会）他二回

- 13日 竹村竜治先生診療援助（婦人科）他一回
 14日○昭和六十三年第一回定例総会開催
 15日 棚山しげ子氏来園（カトリック教会）
 17日 園長岩手病院へ診療援助
 “ 金重栄二先生来園（松丘聖生会）
 “ ○地区連絡係定例集会開催
 18日 ハンセン病所長連盟会議
 “ ○医療改善予算要求行動始まる、厚生省他関係省庁へ要請電打つ
 20日 昭和六十三年度物故者慰霊祭
 “ コールド・ウエル兄弟外二名来園（松丘聖生会）
 “ ○監査はじまる
 21日 水沢学苑准看護高等専修学校研修見学
 “ ○獣魂祭
 23日 函館ひとみ会盲人会慰問
 24日 小池与之助先生、川端純四郎先生外二〇名来園（松丘聖生会）
 “ ○監査終了

- 25日 福島県保健予防課、県人会慰問
 “ 神奈川県保健予防課来園
 30日 芳賀玲子氏来園（カトリック教会）
 31日 石田吉男先生来園（松丘聖生会）

あとがき

△高齢者人口の増加する今日的老人問題に関して、青森県立つくしが丘病院長の後藤昭先生に「「老い」を考える」と題し、七回ご執筆頂き本号を以って完了です。長い間誠に有難う御座居ました。厚く御礼申し上げます。（天地）

発行所	財団法人 松丘保養園慰安会
所在地	（郵便番号）〇三〇一〇二 青森市大字石江字平山十九番地
振替番号	（電話）〇八〇一四五・〇一四六 （電話）〇一七二
発行人	松丘保養園慰安会内申田の堀編集局
編集人	盛岡 四一六一七八
印刷所	阿部 鹿次郎 天地 聖一
印刷所	青森市大字幸畑字松元六二ノ三 青森コローニー印刷
電話（代）	〇八二〇二番
定価	二二〇円 千二二〇円